



平成8年の田島ヶ原のサクラソウ自生地

白いサクラソウ（磯田洋二氏撮影）

## 信州さくらそうの思い出

吉岡義雄

数年前同好の会員の方々と、信州を旅した時の事である。大町市の山中で「さくらそうの自生地を一人で守っている老人が居る」との地元の方の案内で、尋ねる事になった。その場所は人里離れた山奥で、道路から沢伝いに入り、砂防ダムや巨石が道を塞いだりして林の中へ入った沢の所であったが、周囲は鉄線や丸太で人が入れないようになっていて、堀立小屋の白髪の老人がその人であった。飲物迄用意して待って居た老人は、笑顔で次のように話してくれた。この辺の沢には沢山のさくらそうが自生していたが、開発や土砂災害を守ると言う理由で砂防ダムが幾つも作られ、さくらそうは全滅するところだった。一人反対運動をしたが認められず、止むなくさくらそうをこの小さな自生地へ移したが、この花も持って行かれる始末で、花の頃は1人で泊って守っているのだと云う。命を救われたさくらそうは色あざやかに咲き誇り、私達を歓迎し喜ばしてくれた。老人は命のある限りこの花を守り続けると云い、花

を鑑賞し栽培するだけの私達はその気骨に頭が下る思いであった。

今、浦和のさくらそうは特別天然記念物として保護され、年々株数は増加していると云う。しかし、荒川の左岸は、戸田・道満・田島ヶ原・土合・大久保・錦ヶ原と一面にあった事を覚えている。ボートレース場、公園、体育施設と両隣の自生地は近代化の前に消滅している。さくらそうに限らず、野生のものは自然の環境の中で生かしてやるのが一番良い事ではあるが、難しい事も良くわかっている。

しかし、過保護にならないよう生かしてやりたいものである。

信州であの老人が子孫を増やしてくれと云って皆にくれた1株の花は、今年も徐々に増えて元気に咲いてくれた。そして、増えたさくらそうを古郷の信州へ沢山帰してやりたいと思っている。その時迄、あの老人やさくらそうには元気でいて欲しいと願うものである。  
(埼玉さくらそう会会員)



## 田島ヶ原のサクラソウと昆虫の不思議 (1)

磯田 洋二

第2次世界大戦が終り、世の中が落ち着いてくると、いろいろな文化活動が盛んになりました。

そんな時、浦和市内の小・中・高の生徒や先生、大学生や一般の方々が参加して、『浦和生物同好会』が結成されました。会の顧問や指導者には、須甲鉄也先生や江森貫一先生など、当時の埼玉大学の先生方が参加され、親しく指導してくださいました。そして、観察や採集、講演、研究発表などの催しには、いつも大勢がつめかけて、それは盛会でした。観察や採集には遠出もしましたが、近場の秋が瀬や見沼には度々出かけました。

当時の秋が瀬は、なだらかな起伏が続き、低い所には小川や沼の点在する湿地が広がり、ハンノキ林やクロチク林がこれを取り巻き、やや高い所にはクヌギ、エノキ、ムクノキ、ケヤキなどの雑木林が連なっていました。堤防に沿った所は立派な田圃や畑になっていましたが、秋が瀬一帯には虫食いのように食料増産のための開墾地が広がっていました。つまり、人手がかなり加わっていましたが、まだ手付かずの自然が沢山残っていたのです。

さて、春の観察と採集の会が秋が瀬で行われたとき、満開のサクラソウを前にして、江森先生が「サクラソウには、雌しべの先が雄しべより高いところにある花と、雌しべの先が雄しべより低い所にある花があります。一つの植物でどうして二通りの花があるのか」といって、皆さんも知っている進化論のダーウィン先生によるてえと、昆虫が蜜を求めてやってきたときに花粉を運んでもらい、異なったつくりの花で受粉する仕組みになっているといっています。サクラソウの花を採って縦に裂いて見てえと、花

のつくりが解りますから、皆さんも見て考えてください。また、どのような昆虫が蜜を求めてやってくるのかということ、まだ誰にも解っていないので、ぜひ皆さんで調べて見てください。」というお話がありました。蜜を求めてやってくる昆虫なら、チョウ・ミツバチ・ハナアブの仲間ではないかと、一面に咲いているサクラソウの群落の間を熱心に探し歩いたものですが、そのような昆虫は見当りませんでした。チョウの仲間のモンシロチョウ・スジグロシロチョウ・モンキチョウ・ツマキチョウ・キタテハ・ギンイチモンジセセリが、サクラソウの群落の上を横切って飛ぶのは観察できたのですが、ほとんどの個体は素通りしただけでした。スジグロシロチョウ・ツマキチョウ・キタテハの中には、花にとまった個体もありましたが、熱心に蜜を吸い求めている個体はありませんでした。ミツバチやハナアブの仲間には、飛び交うものも見られませんでした。

やがて、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫について、秋が瀬では、(1) サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいるならば、その昆虫は何か。(2) 秋が瀬には多くの昆虫が見られるのに、サクラソウの咲く頃に少ないのはなぜか。(3) 秋が瀬にサクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいなくて、たくさんの種子が実るのはなぜかという、3つの疑問を解決しなければならないということになりました。そして、多くの人々が秋が瀬を尋ねて、観察や調査をしましたが、その後も、謎解きは出来ていません。しかし、謎は少しずつ解け始め、また、あらたな謎が生まれています。この謎については次号で詳しく述べたいと思います。

(浦和市文化財保護審議会委員)

## サクラソウ関係図書紹介 (1)

ここでは、内外で発行されたサクラソウに関するあらゆる図書を逐次紹介していくことにする。単行本はもちろん、雑誌等に掲載された学術論文から随筆や紀行文に至るまで、すべてを含める考えである。なお、文中、敬称を略したところがある。また、その図書の所蔵場所が公的なものは、それを示しておくことにする。

### 野生のサクラソウ ガーデンライフ・東京山草会共編

誠文堂新光社 昭和52年 A5判 317ページ 上製本

およそサクラソウについて、知りたいことがすべて記されていると考えられる図書である。まず「日本のサクラソウの分布」と題して井上健氏の論文がある。サクラソウ属の分布やユキワリソウなど個々の種の日本での分布まで図示しており、続いて1ページの記事で、小解説や意見などが載せられている。以下、同様なかたちで、「日本のサクラソウの種類」(井上健)、「日本のサクラソウの仲間の生態」(斎藤常夫)、「サクラソウ類の作り方」(六城雅彙)、「サクラソウの交配」(同)、「サクラソウ作り五つのポイント」(大垣晃一)、「夏の越しかたと二期栽培」(小田倉正樹)、「自生地に学ぶユキワリソウの仲間」(高橋幹男)、「サクラソウの育種」(大垣晃一)、「東部ヒマラヤ・ブータンにサクラソウを訪ねて」(山崎敬)、「外国産のサクラソウ」(萩原純一)、「各地におけるサクラソウ類の作りかた」